The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	空中の集落　沖の島
Author(s)	吉原, 卓男
Citation	デザイン理論. 2011, 57, p. 148-149
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53540
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

調査報告

空中の集落　沖の島

吉原卓男 / 大阪芸術大学

沖の島は、高知県宿毛市片島港より海上約 25km、豊後水道の最南部、太平洋への出口に位置し、周囲約 17km、面積は 10.5km² 南北にやや細長い島である。調査の目的は集落形態で特異な様相を示す“かたち”の“あらわれ”のいくつかを抽出し、その意味と内容について考察を深め、沖の島の集落は「空中集落」との見解を明らかにすることにある。島の主要な二つの集落の一つ弘瀬については、地形と卓越風がつくる特異な“あらわれ”を報告する。母島については地形と卓越風がつくるその空間構成、及びその“かたち”を調査しその様相を写真に納め、空中性について考察を進めた。写真はパネルによる報告の一部である。

【弘瀬地区】 集落は、島の南西部、高峯妹背山（404m）からの山嶺の南端、西斜面を背に位置する。降る雨を集める幾筋かの小さな流れは、山腹斜面を削り西の海に向かって湾曲し開かれた入江をつくる。集落は斜面の中央やや南寄り、二つの峰がつくる谷間の流れは大きな流れになる間もなく海に達する河口付近、海蝕段丘上に位置する。かつては花崗岩の絶壁がそのまま海中に没する海蝕崖で海と隔てられていた。近年、海岸に接し島内を巡る周回道路、波除けや突堤等の港湾施設が建設され、崖は石垣とコンクリートで覆われた。現在、崖上の集落とは、幾筋かの階段とスロープで結ばれている。同じ時期、渓流は三面貼りの護岸が施され、従前の姿を失い、かつての豊富な水量はない。集落は、谷川が削る谷間の内斜面と谷川の左右斜め上方に広がる斜面と山腹がつくる稜線を軸として外側へと広がる傾斜地形の中にある。

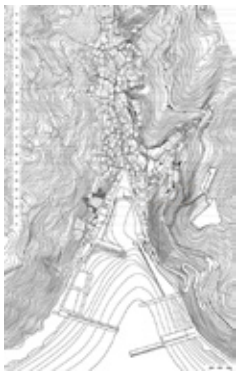
干棚

干棚

弘瀬集落前の海

妻側を見せる住戸

弘瀬地区写真：集落西の海からの強烈な卓越風（北西乃至北北西）に対し妻側を向け、敷地への入口及び住宅の開口部を、風下の南に配置、風の影響を避けるのが集落の“かたち”である。



母島地区の地形図

峠より西の海

深く刻まれた谷間

渓流上の干棚

母島地区写真：西の海からの強烈な卓越風は谷に沿い東の峠に向かって吹き上がり、谷川の流れに並行する動線が集落の主軸を形成する。

【母島地区】 集落は島の北西側、南北の山腹傾斜がつくる狭隘な東西の谷間の西側に位置し、集落の中心を山腹に降る雨を集め絶えることのない谷川が流れる。流れは山腹を鋭く切り裂き谷間を刻み、陸を削り海に達して入江をつくる。船泊としては格好の浦である。集落の住戸は主に東西の比較的奥行きの深い、この流れに沿った連なりを中心に南西斜面の谷間の窪みの集まりと、港を取り巻く海岸段丘上の住居の連なりによって形成されている。

母島・地形により異なる住居の形態

① 海から東の峠へ、渓流に沿って水と生活動線による住戸の連なり。集落の主軸を構成。

主動線を隔てて水場に降りる石段　　石段とスロープから成る主動線

南北両側から斜面が迫る狭隘で奥行きの浅い河岸段丘に、谷の流れに沿って軒を連ね住戸を建てた。当然流れとの間には私的な専用空間を確保するゆとりなど無い。深く刻まれた谷川と、家屋の間の僅かな空地は、住戸の前を流れる清流を使用しての住人の炊飯や家事、農・漁のための“にわ”的作業空間として利用された。あわせて、上流の住人の生活動線としての役割も担った。

② 主軸の動線と、谷上流で等高線と交叉し水平に西行した横軸動線に沿って成長。

空中にせり出す干棚　　私的空間に貫入する集落の生活動線

山腹斜面の住居の連なりのなかで、生活動線が山側の居住部分（座敷は掃きだしで通路に向けて開口している）と谷側の防風壁・干棚とのあいだの極めてプライベートな空間を通り抜ける。谷間の住戸を繋ぐ細路が狭隘な谷間の煩雑なコミュニティの関係を含めて、形象化・装置化された典型的母島型住居である。

母島は空中の集落へ

急峻な山腹を繋ぐ石段　　可能性のある僅かな土地をも耕し畑に　　目もくらむ石段　　地形に沿いうねる細路

集落を形成する環境要素は有機的結合のなかにある。結合が一部でも切れたとき、欠損部は何等かの有機体に依って補完される。母島の場合それは雑草でも荒れ地でもなかった。急峻な地形のなか微妙なバランスを保って成立している地を雑草に委ねるには地区の自然条件は過酷である。小さなダムの集合体のように成立している谷間の地はダムの維持が地区成立の条件である。自然のバランスのなかに組み込まれた島の生活は僅かな油断をも許されない。母島の場合、撤去された住居跡地は空白の地となりその役割と意味を変える。自家菜園、あるいはかつて覆っていた家屋の屋根瓦を地上に敷詰め浸透水のバランスを保つ。空白の地は余白の地へと意味を変えるのである。過密化した集落が、飽和点に達した時、建物を一部間引くことによって残るものが新たな活力を得るのも自然淘汰の世界である。余白の地は前もって計画されたものではない。まして周到に計画し芸術的に昇華されたものではなく、日常生活から自得した構図である。かつて満たされていた土地が、空っぽでなにもない地に変化し、結果的にそれは、余白となって空中集落のフィジカルステージステージとなり、空中を感じるステージがつくり出されるのである。